

×月×日

フェルメールの独特な写真画は、そのあまりに見事な写真実性から、何らかのカメラ的なものを使用したらしい、といわれてきた。実際、彼が生きた十七世紀のオランダで、カメラ・オブスクラと呼ばれる一種のピンホール・カメラ（針穴写真機）が使われていたから、それを使ったにちがいないといわれてきた。私は少年雑誌の付録のボール紙製針穴写真機で遊んだ世代だから、へー、と思った。

フィリップ・ステッドマン『フェルメールのカメラ』

（新曜社 3200円＋税）
を読んで、当時のカメラ・オブスクラは、オモチャの

針穴写真機とは全く似て異なるものであることを知った。

カメラ・オブスクラは当時、ヨーロッパで広く「自然魔術」として見世物などに用いられていた。それはしばしば巨大な黒テントの中で、外の景色を壁に映して見物客たちに見せて喜ばせるなど大仕掛けなものだった。そしてピンホールの穴の上に眼鏡用のレンズを置くと、像がより鮮明になって美しくなるなどの改良が加えられ、カメラ・オブスクラから最新式の望遠鏡が生まれていった。カメラ・オブスクラの名前を最初に考えた人は、なんとあのケプラーだった。ケプラーとフェルメールは同時代人だった。

それだけではない。フェルメールに最初にカメラ・オブスクラの技術を伝授したのは、顕微鏡の最初の開発者として知られるレーウエンフックだった。望遠鏡も顕微鏡も実は同根の光学技術なのだ。

著者は、フェルメールが住んでいた家を訪問し、そ

の家の床が、フェルメールが描いた家の床面と同じ大理石のタイルで今も覆われていることを発見する。そしてその幾何学模様のゆがみの精密分析から、その絵を描くの用にいたカメラ・オブスクラがどこにどのようには置かれていたかをピッチリはじき出し、その絵に描かれていたのと同じ服装の人物を同じ風に配して、フェルメールの絵と同じ画面をカメラ・オブスクラの画面上に作ってしまったというから面白い。

